

# CHOISIR

VOL.25



神奈川県立  
かながわ女性センター  
1992.12. 8  
図 受 入 館



二本木由実&掛札悠子の

## ことばフェチ往復書簡



二本木由実発

第7信

やっぱり笑われてしまったか……。まあ、でも私も、“女の人の恋愛は運命的”ってところで笑ってしまったけどね。掛札さんに、そういう一時期があったのね、と何だかうれしくなってしまったの。ふふ。

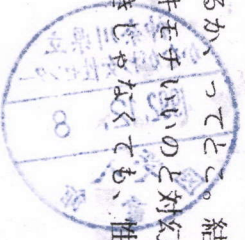
対幻想についてはね、あれからわりと考えたんだけど、だんだんはつきりしてきたみたいで、今回はもう少しくわしく書けると思う。つまり、掛札さんが教えてほしい、つってたところ。セックスのときに対幻想でキモチよくなるか、つってところ。結論から先に書きましょ。答えはノー。キモチいいのと対幻想は、近いけどちがうのでした。好きじゃなくても、性欲はうごくのよね。うん。性欲がう

ごけばキモチもよくなるし。さわられたりすれば、感覚受容器はちゃんと刺激を脳に送りこんでくれる。で、脳内麻薬は分泌されるわけで、ハイになるのよね。嫌いなヤツが相手のときは、それ以上に感情が強く働いちゃうのか、楽しくないが。

で、そこに対幻想の入りこむ余地はないわけだ。快感ってわけね。私の対幻想、というか、「この人とわたしはすごく近い、すごく親密だ、排他的関係だ」という観念は、じゃ、どこに出でくるかというところ、快感の前なんだよ。

私の初体験って、前に書いたように好きでもなんでもない人だったんだな。で、その人って、私の友人の恋人だったのよ。要するに間女したわけね。キモチはまああよかったけど、罪悪感がすごくて、友人とうまくやっつけてなくなっただけよ。友人はセックスしたことちゃんと知っていて、「気にしない」って言うんだけど、セックスがキモチよかったのというらばはらばに、すごく気分悪かったの。恋人同士っていうの、私にとっては性的に排他性を保つ関係、というもんであって、それで友人を裏切ったような感じがして、セックスで他の人間関係こわすくらいなら、やんない方がいいな、と悟ってしまったの。

だから、私にとっては、安心してセックスできる人間関係が必要なんだな。小心者だし。それがセックス友だちでもかまわないっちゃかまわないうね。そういう友だち持ったことないから、わかんないけど。そら



へんではじめて(?) 対幻想さんの出番がくるわけよ。  
「私にはこの人だけ。この人には私だけ」ってね。セックスする前に、「あとくされがない」という保証がほしいわけ。で、私は性悪説の人なので、「恋人とかいる人相手だと、あとがコワイ」になるわけだ。

それに、1回や2回のセックスでカンタンにはキモチよくならないと思うのね。実際、はじめての人がそうだったし、今の彼女ともそうだったし。ヌスターベーションとかで、どういうのが気持ちいいかはわかってたけど、1、2回ねた程度では、それを相手にうまくわからせられないと思うのね。(それとも私がヘタなだけなのかな?) 相手のきもちいいところも、キモチのいいやり方も、わからないし。コンナイトのおもしろさもあるんだろけれど、私はやっぱり特定の人と、じっくり手間ヒマかけて、キモチよさを追求する方が好きだな。もちろんその特定の人が、私の好きな人で、私を好きな人なら、何もうことなしかけど。

というわけで、これが私の対幻想の正体だったんですね。だから、戸川純さまの歌う「バーバラ・セクサロイド」のよーなレザリカントがいたら、こんな幻想など玉と砕けるのかもしれないね。なぜって? 純さまによると、私のデータをインプットすれば、バーバラ(コードネームだ)はイイこととしてくれるそうらしいので(ああ、私って今日はキレてる……る)。

こういう快感のしくみとかは、ヘテロもホモもバイも

変わらない何かがあるんだろうし、実際、私がヘテロだったとしても、こんなふうなセックス観は同じだったろうな。まあ、保守的というより、リベラルぶったヘテロになってたかもね。

うちの母って仕事してるから、自然と「女も手に職つけるべきだ」って考えるようになったのよ。オヤジはオヤジで「弱い者は助けてやれ」なんて任侠心をインプリントインクするし。まあ、一方でおヤジ、家事も仕事もやってる母にくらべてみると、見事にグータラだったから、「男ってズルいぞ」という疑いもインプリンクしてくれたしね。きつとヘテロでも、妙な正義感のあるフェミニズムキャリアねーちゃんになってたんじゃないから。ただし、「ホモ」には冷淡な。オヤジはオヤジはマツチャオだけど(?) 「ホモ」の「ホ」の字も頭にないよーな人だし、母は「ホモは病氣」の人だし。

高校のころかな、おもしろいことがあってね、コンサートホールの女子トイレに「ユーミン大好き」ってエ落書きがあったと思いいねエ。うちの母、それを見つけて、「由美、心あたりはなかね?」って血相変えるのよね。結局、妹の「おかーさん、それは松任谷由美じやないの、と一言で、私の「レス疑惑」がひととおりはれたんだけどね(はれてねえって)。あの母の様子見て、すでに同性を意識しはじめ年頃だった私はビビったわ。…私あての落書きじゃなくて、ガツカリもしたけど。

まあ、それから、男の子への擬似恋愛ゴッコなど1、

2 ありました。遅ればせながら高校3年の春、初恋をしたのでございます。聞きたかや？ やだって言ってもムリヤリ話するもんね。ふふっ。

相手は、同じクラブの同級生。色が白くても静かで、切れ長の目の酷薄そうな唇がそる（おいおい）女の子だったわ。久美子（当時17歳・仮名）はけっこう、人見知りでひっこみ屋だったんだけど、吹奏楽部の同級生トだった私にはなついてくれたのね。並んで歩いてると手を絡めてきたり、広い教室で必然性もないのにすぐ横で練習したり（管楽器って音でかいから、個人レッスンはお互い近くでやらない方がいいのよ）。自分が女の子にひかれることは、もうわかっていたけど、恋できる、とは考えなかったのね。彼女を好きになるまで。2年間そばにいたのに、あるきっかけで気持ちがあつたよ。

高3になったこのころのある日、遅い練習終えて帰るとき、靴置き場でいきなり彼女が走りよって、私に抱きついたのでね。他にも、抱きつけそうな女の子はいたの。それで、私にしがみついた彼女の髪の毛の匂いとか、温かさとか、柔らかさとか、彼女がはなれたあとともまわりついて、たまらなかつた。抱きついてきた理由は、靴置き場をまちがえた、2年のときの所に行っちゃったって言った。（そういうささいなことまでおぼえてたりする私）それがきっかけ。

それからもう、お決まりのパターンで、人ごみの中

で目が合っただけだったり、後ろから目かくししたり、手握ったりって、そーゆーカワイイコミュニケーションでよるこんでたな。書くとき長くなる（小説くらは書いてる。そーゆーもんだけども、初恋ってば）ので、結末に行きますが、久美子とはキスもなかった。大学1年のときふられたからね（そのあと3、4年ひきまづった）。

久美子の言動から、彼女も私を好きでいるはず、と思いきや、だとしてとずいぶんひどいこととしてきたと反省し、自分に正直になろうと決意したんだ。そこまではよかったんだけど、彼女の返事は「あなたはかんちがいしてる。私には好きな男の子がいる」というものでした。大笑い。でも、自分に正直に、という決意はゆるぎなく、その後女の子、女の人はかりにホレまくり、現在に至る、というわけでございます。思いすごしも恋のうち、とは名言でございますが、二本木由美、一世一代の思いすごし、の巻でありました。ちゃんちゃん。

しかし、考えてみれば、共学校だったにもかかわらず、私はけっこう女の子になつた。劇部の子には「毛人」（『日出処の天子』のね）といわれてベタつかれ、美術部の長身美人には早朝、人気のない階段でキスをされかけ（キヤー！ と叫んでつきとばした私……、な、なんともったいない……）、「彼女にして」と戯れ言をかけられたことも何度か……。うーん、かえすがえすも残

念だ。残念すぎる。今から考えると、ほんとうにもういいいなか。久美子にしても、押し倒すチャンスはいくらでもあったのに（おいおい<sup>9</sup>）できなかったもんね。彼女と2人だけになると、ギョギョ、ロボットみたいなことばもうまくでてこないのに、手もにぎれないのに、ウル・トラC級、できるはずもないわ。あのころをもういちどやり直せっていわれたらやり直したくはないけど。当時の私ものかけから見守ってられるとすれば、イライラして机くらいは投げつけるかもしれない。うん。「なんでそこで手を握らない！」とか「今だっ！ キヌくらいいしろっ！」とか。うーむ、ほんとにイラつく高校生だったぜ。精神衛生に悪いので、この話はおしました。わっはっは。無責任な私。

でも、よくおぼえてるよな。あきれるぜ。失態の恨みは忘れないってやつか？ 相手が女の子だってこと除けば、ちょっとオクテのヘテロと似たりよったりなんだと思っただけだね。レスピアンなんて少数派で、社会の体制にくみこまれてないからラディカルなだけで、それはほんとおっしやる通りと私も思う。マルキシズムもロシア革命まではラディカルだったはずよね。民主主義だって、政党政治だって、普通選挙だって、体制にならないうちはそういう思想って弾圧されてたんだし。ラディカルかりベラルカコンサパティオかって考えさせられるのは相対性だけじゃないかしら。レスピアンだっていうの

とフツーに恋したと思ってる。ただ、女の子相手だったから、しばらく気づかなくて、人<sup>フレンド</sup>よりちょっと余分に苦しんだのかもしれないだけで。恋のはじまりが抱きつかれたこと、なんて、ホント、古い少女マンガのパターンよ。

こうしてみると、自分がレスピアンだって気づくきっかけって、ホント、ささいなものなんだね。ラクダの背中がわら1本でおれるって言うけど、ほんとに何がきっかけになるか、わからないな。久美子があどとき抱きつかなかったとしても、別の何かで恋に気づいたかもしれないし、久美子じゃなくて別の誰かだったかもしれない。ただ、ちやうどの時に、ちやうどの所にいたのが彼女なんだろかな。そうすると、掛札さんの「運命的」を笑えないってわけか。しまった<sup>9</sup> ま、いいや、矛先を掛札さんにむけよつと。今度はあなたの初恋話、ききたいもんです。今回、キレまくって、ひたまりまくって、お脳をやられまくっていると暴露してしまっただ二本本でしたが、どうかお許しを。それで、掛札さんの初恋、きかしてくださいね（ツッコイ<sup>9</sup>）。よろしく。



ごちそうさまでした、色川さん。

しおせ ぽる

VOL. 24の色川の「おいしい」恋愛幻想」は、背中に毛虫が入って取れんような、なんとも言えず気色悪い文章だった。

色川は最初に「対幻想は『男』に都合よく運ぶために使われる」ので、「NOを言いたい」と言ってるのに、後で、対幻想は「対という関係に閉じ込める幻想のごと」で、「恋愛に対する幻想と言ってもいい」と言ってる。ということとは、「恋愛幻想」「対幻想」と考えてもいいのかな。タイトルの「おいしい」対幻想」というのも気になるけど……。

そのあと、「セックスはあくまでも行為であって、関係性じゃない」と言うてるけど、そこまでは私もよう分かる。セックスはあくまでもセックスや。セックスしてるから言うて惚れてるわけでもないし、惚れてるから言うてセックスするわけでもない、私、最近、実感（実践）してますから。

「性的な琴線に触れ」たときに「相手と特別な関係性をつくりたいという感情が起こる」。でもそれは「関係性に欲情しているのではなく」て、その後は、「会話などによって相手と意気投合できれば、関係性をつくりは

じめるってこと」だ。ここが、さっぱりわからん。まず、「言葉で分かり合う」なんてことが幻想なんだけど、それは置いておくとしても。

で、付き合い始めた後は、「関係性に欲情しているわけではなくて、もちろん関係性があるということは前提になっているわけだけだ」 「関係が特別なんだと思ってること」 「関係性が築けているという物語性、に欲情する」？ なんや、なんや。

「関係性がある相手とのセックスが特別に気持ちいいのは」「やりとりが、関係性がない相手」よりも「やりやすいからだ。」だって？ この「やりやすい」も幼い言葉でわかんない。相手にやさしく、自分に素直になれる瞬間」って言いたいなの？ もうーっ、「関係性、関係性」って、いったいなんやの！

まだある。「関係性がある相手とのセックスのほうが、そうでない相手とのセックスよりランクが上だ、っていうのは、ただのファンタジーだ」。だったら、「関係性がある相手とのセックスは特別に気持ちいい」とどうちゃうの？

要は「関係性」も「物語性」も「幻想」なんだと。「特

別なんだと思っている」「関係性が築けている」という  
「幻想」に欲情しているのだ、と言いたいのか。「おいしい」と。

でも、そうかと思って読むと、「例え、それが思い込みであって」とか、「それも幻想と言ってしまえばそれっきりだけ」とか言ってるでしょう？ えーん、わかんない！

悪い悪い……。分かってはいるけど、認めたくないんだよね。ま、恋愛の渦中ちゅうたら、誰でもこんなもんでしょ。（『野合』にもそんなヤツがおったなあ……。となつかしそうに。）

最後の「特定の人と特別な関係になりたい願望が強い」だの、「対幻想にとらわれている」だのにいたると、もう恥ずかしいものがあるけど、私には痛いほどよく分か

のりがとうね、ぼるさん

色川 太京 緒緒

以前は、恋愛が非日常から日常に移行していくにつれて、性別役割分担が色濃く見えてきたりしたものです。生活のささいなことからセックスまで、ガリガリ言わなければならぬことが、いっぱいいっぱいありました。泣いたり怒ったり諦めたりという、「愛しすぎる女」のフルコースみたいな日々を過ごして、疲れ果てて自分から降りる、を繰り返していました。

ります。「時が経てば」「『情』に変わることもそれなりに情緒深いし、「恋人を『人生の共犯者』もしくは『同行者』にしたいと思う気持ちも『胸キュン』です。

最後に、私の好きなドイツの女性監督ドリス・ドリーの作品「心の中で」の中の一シーンを紹介するね。冷たい態度の恋人に対して、女が「クールな関係でもいいから……」って懇願するんだけど、男が一言「関係？」って聞き返すの。

恋愛なんて「幻想」なんだ。そのお互いの「幻想」が、たまたま隕石に当たると出会うときに華なんで、そのときはせいぜい「幻想」に酔えばいいと思う。ゴメンね。私、今すぐくクールなの。

——ところで、「耳の穴から、脳ミンがもれるような」感じってどんなの？

でもそのお陰で、中身が空っぽなヒドイ関係を我慢し続けるより、自分ひとりの孤独を楽しむことを選べるようになったのは、進歩だと思っています。

しかし、気持ちというものは状況によって左右されるもので、ほんっと、二七歳の小娘のハートなんて、たったひとつの幻想でどうにでもなるものだ、シミシミ思っています。

脳ミンが耳から流れそうなのは、とまりつつあるようです。それじゃ、生きていけませんからね、社会復帰するつもりです。ところで、あの一言ですべてを察知したぼるさん、あなたは私にとっては「脅威の姉」♥

きらきらひがる

笑子はちょっと情緒不安定でアルコール依存症だ。どうしてそういうことになっているのかは、観ている者にはわからない。だけど、たぶん「女の子」病であろうことは、想像がつく。あるいは、「現代っ子」病かもしれない。だから、特に人並みはずれて情緒不安定なわけでも、酒がないと手が震えるほどアルコールに依存しているわけでもない。

そんな笑子と、ホモの睦月がお見合いの結果、結婚し、紺という、睦月の恋人との三人の物語が始まる。

笑子に「生への貪欲な欲求」が感じられないのと同様、睦月にも覇気はない。両親は睦月がホモであることを知っていて、特にそれについて咎めるでもない。だから、睦月がどうしても結婚しなければならぬほどの強い理由は、見えてはこない。おそらくは、社会的な体裁というものに親子して負けたという



夜咲花此



ことなのだろうと、想像するしかないわけだ。  
(原作では、もうちょっと病院内のことが書かれていたと記憶している。)

要するに、睦月は波風が立つことが苦手なのだ。だから、笑子との関係においても、彼はいつも事なかれ主義だ。笑子の一挙一動にヒヤヒヤしながら、ご機嫌をうかがったり、何事もないかのように振る舞ったりして、それがますます笑子の機嫌を損ねる原因になる。笑子は、たぶん〈波風〉が欲しいのだ。ど

んなときも穏やかに接することしかしてくれない両親との生活を抜け出して、ホモの男と結婚するということは、今までの自分とは違う自分を見つける、新しい体験を予期させてくれる。だけど、蓋を開けてみたら、睦月は自分を揺さぶってくれるほどのパワーをもっていないかった。それが笑子の気に障るのだ。睦月とセックスできないことがイライラの原因だとは、簡単に言ってしまうたくない。

睦月がホモであることが笑子の両親にバレて、当然のように離婚が言いつけられるけれど、笑子は拒否しようとする。イライラするのは、睦月が毅然として「拒否」を言い切らないからだ。自分の思った通りに行動すること、親の言いなりにならないことを初めて体験しようとしている瞬間を、睦月が台なしにしてしまいそうだから、笑子はヒステリックに車を飛び出して走っていつてしまうのだ。

やはり笑子の情緒不安定とアルコール依存は両親との関係にあったのではないか、とお

ぼげながらに察することができるとはいえ、それほど明確で強いトーンは、この映画のどこにも打ち出されてはいないが。

しなくてもよかったはずの結婚によって出会った三人は、三人の関係を築いていこうとする。笑子の病も癩癩も、とてもわかる気がして(かつて私がよく知っていたもの、あるいは今もよく知っているものかもしれない)、少女漫画っぽいとは思いつながら、けっこうジーンとしてしまうところもあった。

笑子が「当たらず障らず」主義の睦月の、いったいどこが好きなのか理解できないけれど、それはどうでもいいことなのかもしれない。そんな睦月について、笑子に「優しいの、優しすぎるくらいなの」と泣きながら言わせてしまう作者は、「優しさ」の意味を履き違えているとしか思えないけれど、それもどうでもいいことなのかもしれない。

とにかく今風なのだ、たぶん。フワフワとつかみどころのない人間たちと、フワフワとした関係のなかで、それでも傷つくことも、人を好きになることも、ちゃんとやってるんだ、みたいな、そんな話なのだ。

ただ、紺の涙に後押しされたかのように、睦月が笑子に歩み寄るラストシーンで、「こいつ、また、事なかれに走ったんじゃないだろうか」という疑念が残った。たぶん、笑子の情緒不安定とアルコール依存症は、あの生活のなかでは、悪くなることはあっても、良くなることはないだろう。

## おこげ

何の見返りも求めない「愛」。いっしょに  
いられることがすべてだと思える「幸せ」

監督は、そういうキレイキレイを描き  
たかったらしい。ゲイと社会との関係がどう  
描かれているかとか、それが日本の映画史上  
どうだとか、コムズカシイことは、この際ど  
うでもいい。私に残ったのは、小夜子という  
女が私にとっては遠い存在だったことと、彼  
女を「おこげ」という設定のもとで描きたか  
った監督の意図がよくわからなかったとい  
うことだけだ。

冒頭の海辺のシーンから小夜子は「おこげ」  
っぷりを発揮するわけで、まあ、それがなか  
ったら物語の進展もないわけだが、おこげが  
おこげに目覚めるそのシーンに関して、原作  
(といっても、映画を撮影した後で書いたも  
のらしいが)では、こう書かれている。

男同士の愛は世間から異端視される分だ  
け、純度が高いように思われる。普通の男  
女の愛がしあわせを求めているのに対して、  
倒錯の愛はひたすら官能を求め、最後には  
死にすら立ち至れるのではないかと、憧れ  
を込めて想像していた。

今度生まれてくるときには、あたしは男  
になりたいの。男になった同性愛を体験し  
たい。そこにこそ至純の愛があると思うか  
ら。

こんなふうな思い入れる女たちの中には、  
当然、ホモたちを美化し、ロマンチックな  
彩りを重ねて見つめる視線がある。

でも、美しいものを、美しいと感じて何  
が悪いんだろう。

論理破綻している言い訳って、怖いものな  
しよね。このあとの2丁目のシーンがまた、  
泡立ちもんである。

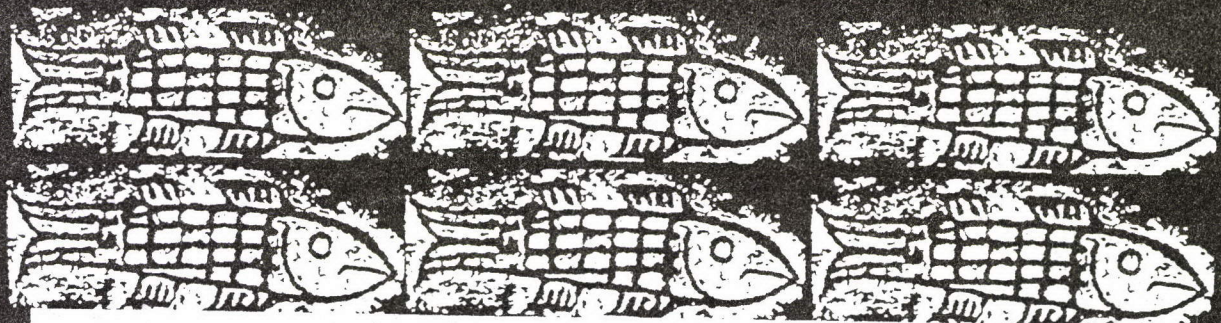
「ねえ、あんた、ホモに全然偏見がないわ  
け？」

「どうして偏見なんか持つの。だって、キ  
ス綺麗だったのよ」

こんなとってつけたような台詞を聞かされ  
るとは思わなかった。いまの日本の状況にお  
いては「説明」が必要だという現実を理解す  
るけれど、どうもこのシーンの台詞回しがそ  
らぞらしい。

「ほんとうに普通じゃない。よそでふたり  
に会ったってホモだなんて分らない。普通  
の男の人じゃない」「変態ではありません」  
って断言した小夜子が、「あんたって、おこ  
げね」と言われて、一おこげなら大威張りで  
剛や柄彦と親しくしていわけだ」と思うあ  
たり、事象に対して名付けられた結果をもっ  
て、その意味内容も問わず、元の事象の存在  
意義を確信するなんて、心底ワンザリ。

そういえば、「大変なのよね。男同士で愛  
し合うって、障害が大きいのよね」って力説  
するシーンもあった。恥ずかしくないんだろ  
うか、こういう台詞。言ってる自分に酔って  
るだけの、白々しい台詞。こんな女をまとも  
に相手にするゲイが私の知り合いにいない  
良かった。



泊まるところの確保できない二人に、自分の部屋を提供するっていう行動自体に特に文句はないが（私自身はしらないと思うけれど）、隣の部屋から漏れてくる圧し殺した声にニンマリするあたり、不気味でしかない。「男たちの愛のかたちを小夜子は現実よりも美しく想像し、その愛にいささかでも自分が手助けを演じたことに満足していた」（原作）ということになる、まったく、どこまでも小夜子をノーテンキに描こうとする監督の悪意を感じてしまう。

要するに、小夜子は現実逃避をゲイに預け、おせっかいをすることを美德だと勘違いしているだけのイヤな女だ。

その逃避したい現実というのは「男（社会）」なわけで、それはいたしかたない現実だから、理解を示すことはできる。小夜子の場合、幼いころ、眠っていたら夜中に親父にキスされたっていう忌まわしい過去があるわけだし。

しかし、その過去に対しても、原作では、親父はただ単に小夜子がかわいくてキスしようとしただけで、「小夜子はわかっていながら、そのことを特異な体験として位置づけたがっていた。あたしね、父親に強姦されそうになった女の子なのよ、と。」と書かれている。なんという安直な設定だ。女はそれほどヤワでバカな生き物だ、ってことだろうか。それに、性暴力に対してこういうオチをもってくるのは、許しがたいような気もしてくる。少し勉強していただきたいものです。

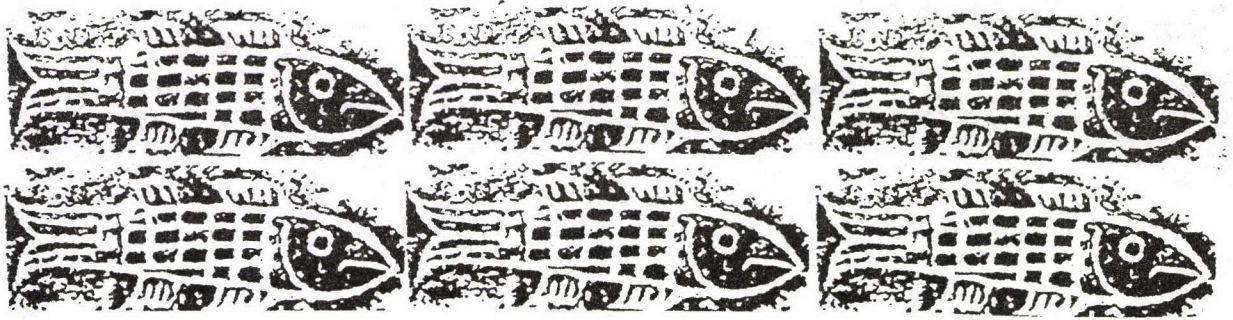
小夜子が「男性恐怖症」から男とのセックスを回避しているとして、だけど剛が好きで、それはセックス抜きのカレイなものなんだと、皆で思い込もうとしている「お話」。だけどそれは嘘だ。そして、その化けの皮は何度か剥がれる。

まず最初が、剛の友達がドゥッと家で騒いでいて、剛の母親が小夜子に「剛と結婚してくれ」っていうシーン。小夜子は「そうなたらうれしいな」と思っているわけで、もちろんセックスに関してはリアリティをもてない現状だけれど、「あ、あたしは別に。急に言われて驚いちゃって」とかなんとか言うあたり、剛がYESを言ってくれたらいいと切望しているのが丸見えだ。もっと言えば、「当然、YESと言ってくれるでしょう？」的悪しき「女」性が剥き出しになってしまっている。だから、皆と一緒に笑った剛を見て、寂しいやら腹立たしいやら、みたいな表情をする。

自分の欲望には素直にならないと損をするものだと私は思ってきたけど、小夜子は、損を損にしない女だ。それが、あの元元衛官に襲われたシーン。あんな状況、絶対に襲われるに決まっているのに、部屋に入れるなんてノーテンキもいところ。

そりゃ、もちろん、襲う方が悪いわけだが、この世の中で生きていくには、自分の身を自分でプロテクトする最低の方法ぐらい知っておくべきというものだ。「やめて。剛が来て





から」、だって。なんだ、それは。元自衛官の「そうか、三人でセックスするのか」っていう台詞は正しい反応だ。

まがりなりにも強姦されてる状況で、「あたしを男だと思ってるね。剛を抱いていると思ってるね」、になっちゃって、開いた口がふさがらない。笑みまで浮かべて、「そうよ。いいのよ」と言われた瞬間には、もうっ。体を張って剛に対する愛を貰いた、なんて言うてくれるなよ。娼婦と聖母のゴツタ煮はもうたくさんなんだから。これがゲイにとっ

て都合のいい女だと明言するのは勝手だが、バカにするのもいいかげんにしてほしい。

それで、一回こっきりの話かと思えば、結局、同棲しちゃって、子どもまで産んじゃって。いったい、なんなんだ？ おまけに、元自衛官がろくに働きもしなかった結果、サラ金の取り立てに追われるところを、剛に助けられるなんて、ドラマだ、ドラマ（当然か）。空想のなかだけで悲劇のヒロインだったのに、それを現実に移行させてしまうのは、無垢で無知の強み、ですかね。思い込みの激しさによる現実の履き違えて、ほんっと、怖いものなしよね。

とうとう剛に「ずっとここにいれば？」って言わせて、それを栃さんにも「よかったな、剛は」と言わせちゃうんだから、女ってへしたたか〜だわ、ほんと。「あたしは剛といられれば、それでいいの」。あーあー、そうかよ、としか言えないもの。これが新しい恋愛

のカチチだっというの？ そんなの、私は要らない。

そもそも、小夜子にとってホモの男（という幻影）がとても大切に思えたという設定には納得がいても、ホモの男たちが小夜子に特別な思い入れをするという設定は、ぜんぜんリアリティが感じられなかった。剛の片思いに関して、「あたしに任せて。あたしがきつと、何とかしてあげる」って言い切る小夜子の、そのおせっかいぶりが都合よかったってことなのかしら。

2丁目を子どもと三人で歩く剛が通りすがりの男と目をあわせると、「いいのよ、あたしは」って言ってしまいう小夜子に、最後の嘘を見たもんね。「いいのよ」だなんて、不適當な台詞。いっしょにいらればいいんだと言いながら、「剛！自分のモノ」だと思ってるんじゃないか。「無償の愛」が聞いて呆れる。

ついでに言わせてもらえば、フリーダ・カローの使い方も気に入らなかった。監督がゲイに思い入れはあっても、女に思い入れがないっていうこと（当然のことだと言って片づけてしまいたくない類のこと）だけは、よくわかったけど。



## 競争原理とヘテロセクシュアリティ

ある人に「同性ときちんとつき合えない人には何も期待できない」と言われた。その言葉がおれの脳天につき刺さり、抜けなくなったので、そのことばかり考えてる。

それで、「同性ときちんとつき合う」ってどういうことか、現実におれが毎日つき合わなければならない職場関係を題材にして考えてみる。

おれの今の仕事は建築資材の運搬で、すごく3Kだけど、時給がいいから、短期間だと割り切って、他の目標への資金稼ぎのためにやってるやつがほとんどだ。プロレスラーの卵、バンタム級のボクサー、バンドやってるやつ、暴対法で暴力団をやめたやつとかと一緒に働いてる。仕事が終わると、おれは彼らに誘われて、毎晩、飯を食いに行く。そして、彼らの試合があれば見に行き、LIVEがあれば飛びはねに行く。こんなふうには、うわっつらは仲良くやってる。

なんで仲良くできるかって言うと、おれの体力と気の強さが彼らに「男」として認められているから。つまり、おれは暴力性を身につけ、「男」に成るということで、「男」の仲間に入れてもらっているということ。早い話が、おれは「男」という制度にコビを売ってる。おれは彼らとつっこんだ話はしない。「男」制度を破壊するようなつっこんだ話をすると、殴り合いになるから。

おれをいつでも暴力をふるえる状態にしておくことと、価値観を破壊しない、うわっつらの会話、これが「男」と対等に仲良くなることの必要条件だ。そしてこれは、「きちんとつき合う」ことと正反対。

この職場には一八才のおとなしい男がいる。彼は、大学進学のために金を貯めてる。彼は一人前の仕事をこなしているのに、年下で腕が弱く、ケンカができるほど気が強くないという理由で、まわりのやつからいじめられている。重い資材をかっいでるときに邪魔をされたり、プロレスのわざをかけられたり、といったことで。いちばんヒサンなことは、彼がそのいじめをコミュニケーションだと思い、ヘラヘラ喜んでしまっていることだ。

暴力的に弱いとかのハンデがある男は、「男」とつき合うには制度としての「女」にならなければならない。それは、自分は身分が下であり、「男」の暴力を一方的に受け入れなければならない存在であることを、えんえんしつつ毎日、確認させられるということ。

こういう上下関係の確認作業を、「男」はセクシュアリティとして持っている。つまり、ヘテロセクシュアリティとは男対男の関係にその本質がある。例えば、スポーツで相手の男に勝って泣く男はたくさんいるが、セックスで相手の女に勝ったと思ってる局部ピストンオンリーのバカ男が泣いたなどという話は聞いたことがない。

竹山佳伸

要するに、男にとっては、自分より身分が低い女に勝つのは当たり前で、勝って出るのは精子くらいなものだ。男は女に勝ったくらいでは「男」として認められない。男は自分と同じ身分である男相手にどれだけ勝つ力があるかで、「男」としての価値が決まる。それがヘテロセクシュアリティの核心だ。だから男は、男に勝ったときにエクスタシーに達するし、目から涙を「射精」する。

ヘテロセクシュアリティを異性愛と訳す人がいてるけど、それは間違いだ。ヘテロセクシュアリティとは、まず同性憎であり、それがむりやり社会的弱者にされてる女性に対して異性憎となるものだ。つまり、弱者憎悪。今の競争原理の社会って、むりやり他者との間に差をつくって、その人間関係におけるフラストレーションをエネルギーにして生産性を加速させる装置でさ、ほんと罪深いと思うよ、だけど、大多数の人間がこの制度化された競争からおいてない。この制度がヘテロセクシュアリティを支えている。

だから、はっきり言って、レズビアンやゲイの中にもヘテロセクシュアリティな人って存在する、というか、ほとんどそうだよな？ むりやりヘテロセクシュアリティなものをつくって、それとの関係になんらかの利潤を得ているという意味ではさ。

市場原理である自由競争という差別再生産装置、これがある限り、ヘテロセクシュアリティはいろいろ姿を変化させて生き延びることだろう。(中略)

男って、自分より弱いものに対しては「女」になって、自分より弱いものに対しては「男」になるように洗脳されてる。つまり、ジェンダーの使い分け。おれは、おれより強いやつに「女」にさせられることがすごくいやだった。いやだと思いつつも、何回も「女」にさせられたけど。そして、その時「女」にさせられるのは、おれが弱いから、おれが悪いんだと、ずーっと思いつつも、自分が強くなるように努力してきた。まあ、それでもだいぶケンカに負けたけど。

こんなことに一生懸命にならなくちゃいけないなんて、ほんとバカバカしいんだけど、おれは、暴力というよろいをつけずに、「男」とどうやってつき合っているかわからない。

そりゃね、フェミニズムをかじってる男とはいくらでも暴力なしでつき合えるよ。そういうフェミニズムの集会友だちはいっぱいいてる。彼らは、話せばわかる人たちだからさ。だけど、問題は、頭ごなしにフェミニズムを否定したり拒否するやつと、どう関係をつくっていくのかっていうことやろ。フェミニズムを実践するってそういうことだから。

こういうときに、おれが「男」に欲情するんだったら話は早いんだけど、あいにくおれは「男」に対して性的な興味がまったくない。「男」と競争することにも興味がない。おれは一方的に暴力をふるわれるのがいやなので、いつでも反撃できる用意をしてるだけだ。

はっきり言って、おれは食欲と性欲にしか関心がないので、やりたくもないやつと関係をつくっていくのは、ホント疲れる。だけど、それをやんなくちゃ世の中変わらねえし、困ったもんだ、まったく。(中略)

ちょっと前に、友人(女性)から「あなたが女とつき合う理由のひとつが『女はあなたに暴力をふるわない』だとしたら、やっぱりそれは、女の足もとを見てるんだよ」と言われた。うん、そのとおり、そして次は三人の女性から、「気が小さいとこ、あるんじゃない？」と言われた。これも、そのとおりだ。これは、おれがヘテロ男と丸裸でつき合う勇気がないという意味で。だけど、「弱さを共有してつき合う」とか「弱い者が弱いままで何の不利益も受けずに関係をつくれるように」とか、口で言うのは簡単だ。ほんまに、そ

んなこと、どうやってできるんだろう？

二週間ほど前、ある女性と知り合った。彼女は今、石川県に住んで、仲間たちと自給自足の生活をしてる。そこでは、性別や能力による差別がなく、みんながフレンドシップで結びついているそうだ。子供も、だれの子供といったことではなく、みんなで育てているらしい。この場所に、競争原理を超えるような人間関係があるのか見に行つてこようと思ってる。はたして、近代的な「個人」と非競争原理は両立するのだろうか？

しかし、近代的な「個人」にさえなれないような状況に置かれ続けてきた女性にとっては、そんな夢物語を聞かされてもピンとこないかもしれない。だけど、おれの友人で男並みに働いている女性の多くが、「あー、しんど。酒でも飲まな、やってられへんわ」と言ってることだけは確かだ。

おれもいいかげん体が壊れそうなので、もうすぐ今の仕事をやめようと思ってる。次はやっぱり、職場の人間とちゃんと友達になれる仕事に就きたい。ま、難しいけど。おわり。

## 年間購読料 値上げのお知らせ

以前、ちょっとお知らせしましたが、来年から、下記の通り、値上げをさせていただきます。

一 部 300円

年間購読料 3000円（年8回発行）

更新に関しては、既に払い込んでいただいている分を従来通りの方法で計算し、それが切れた時点で、新規の購読料の計算方法に変更させていただきます。更新に関しては、本誌といっしょに振込用紙（何号分から必要なのかを明記したもの）を送らせていただきます。

なお、購読料を滞納している方に関しては、今号まではお送り致しますが、その後もお振り込みいただけない場合、残念ですが、来号からの送付を打ち切らせていただきます。

さて、発行回数ですが、約一月半に一度の発行ということにさせていただきました。その代わりと言ってはなんです、内容の一層の充実をはかりますので、どうかご理解ください。いろいろ企画を考えているところですが、皆さんの投稿やお手紙を心からお待ちしております。

今年はこの号を年内最終号とさせていただきますが、来年からの再スタートをお楽しみに。今後とも、どうぞよろしく  
お願いします♡

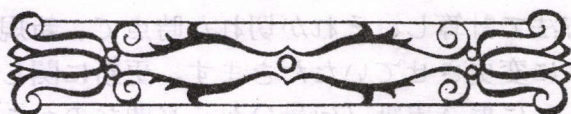
VOL. 25 CONTENTS

- ◆ことばフェチ往復書簡（二本木由実） p. 2
- ◆ごちそうさまでした、色川さん。（しおせぼる） p. 6
- ◆勝手にシネマ①「きらきらひかる」（此花咲夜） p. 8
- ◆勝手にシネマ②「おこげ」（奈緒） p. 10
- ◆競争原理とヘテロセクシュアリティ（竹山佳伸） p. 13

† 「CHOISIR」は選択するという意味のフランス語。産む・産まないの選択と、金や地位や関係性の代償行為ではない、自分にとって本当にキモチいいセックスを考えています。

† 皆様からの投稿、お便りをお待ちしています。掲載していいものに関しては、ペンネームなどをお忘れなく。投稿に関しては、原則として検閲なしで掲載させていただくつもりですが、場合によっては掲載を見合わせていただくこともありますので、あしからずご了承ください。

また、こんなテーマを取り上げてほしい、読者同士で情報交換がしたい、など企画も大歓迎です。ぜひご一報を。



CHOISIR (ショワジュール) VOL. 25

発行・編集 CHOISIR

郵便振替

発行年月 1992. 11

定 価 200円

年間購読料 2000円